

# 沖縄県立芸術大学附属研究所文化講座「宮古の歴史と文化」要旨集

## 第1回 宮古の歴史と文化

仲宗根将二(宮古島市史編集委員長)

沖縄県立芸術大学附属研究所主催の公開文化講座が、初めて「宮古の歴史と文化」をテーマに開かれている。毎週水曜に14回(4・17～7・17)、宮古の先史時代から、古琉球、近世琉球、近・現代に至る歴史はじめ、祭祀、神話、伝承、歌謡、方言、工芸、民俗音楽など、すべて宮古関係者による講座である。

4月17日第一講「総論」を担当し、宮古史の特徴的なことを幾つか紹介した。およそ次の通りである

### ○「南島文化圏」

九州の南から南西へおよそ1000キロメートル、弧状に連なる島々の先史時代は「本土文化圏」を相対化し得るほど地域性豊かな歴史を展開しており、「南島文化圏」とよばれている。大きく三つに区分される。種子島・屋久島中心の北部圏は九州文化とほぼ同一、奄美・沖縄諸島の中部圏は、縄文後期ごろから、弥生文化の影響を受けつつも、地域性豊かな文化を展開しはじめる。南部圏の宮古・八重山は縄文・弥生の文化にまったく関係のない独自の文化とみなされている。

12～13世紀ごろから、中部圏と南部圏は交流を密にし、「琉球文化圏」を形成していく。

### ○与那覇勢頭豊見親の中山朝貢

『中山世譜』や『球陽』の琉球正史は、宮古・八重山が沖縄本島の王権と初めて公的交渉を持ったのは14世紀末、1390年で、これによって国勢(中山)初めて強し」と明記されている。島々が力量相応に進めていたであろう貿易を、中山(琉球)に集中独占化し、富をもたらしたというのであろうか。

中山朝貢を成功させ、宮古に豊かな文物をもたらした真佐久を、宮古の人びとは「与那覇勢頭豊見親」と尊称したという。与那覇は地名、勢頭は「シズ(セジ)=靈力」、豊見は「響動む」名高い、「与那覇の神のごとき支配者」の意であろう。

### ○朝鮮・済州島人の見た宮古・八重山

1470年代、与那国島で救助された3人の朝鮮・済州島人は、西表、波照間、黒島、新城、多良間、伊良部、宮古島をへて琉球に送られ、那覇で博多商船に便乗させてもらい帰国した。3人は南方色濃厚な文化の上に、沖縄本島一北の文化が島伝いに伝播しつつある状況をつぶさに見聞したことを、「李朝実録」は伝えている。

併せて、3人の見聞談は、この時期、遭難者を那覇へ転送する仕組みができていたことも教えている。

### ○仲宗根豊見親の「冶金丸」献上

1500年、首里王府は八重山のオヤケアカハチらを制圧した。先導役をつとめた宮古の仲宗根豊見親夫妻はその功により、祭政両面から宮古・八重山の支配者としての地位を一層

強めた。しかしその後1522年、嫡子の不祥事で王府の指弾をうけ、宝剣「冶金丸」と宝珠を尚真王に献上することで一族存亡の危機を脱している。宮古・八重山が琉球王国の版図に正式に組み込まれたことを示すものであろう。

#### ○薩摩・島津氏の琉球侵略

1609年、薩摩藩は江戸幕府の同意を得て、琉球王国を制圧した。奄美諸島は割譲され、形は独立国でも実態は幕藩体制に組み込まれている。宮古・八重山は従前の在地役人による間接統治から、王府派遣在番の直接統治に変わる。人頭税制も整備され、1729年には身分制も確立する。統治する側「系持(士族)」、生産する側「百姓(平民)」である。役人の綱紀の乱れは民衆を苦境に落とし入れる。「百姓一揆」ともみなされる事件が頻発するようになる。

#### ○人頭税廃止運動と旧慣改革

1879(明治12)年、「琉球処分」で沖縄県となったが、明治政府は旧支配層への配慮から、旧慣温存策をとったため人頭税も存続した。明治20年ごろから廃止運動が起こり、激しい妨害のなか上京した宮古農民代表の政府ならびに貴・衆両院義会への請願は成功する。

それを契機に、沖縄全島の近代化は促進されたが、日清戦争の真只中という側面も軽視できないであろう。

#### ○普通教育始まる

1880(明治13)年、普通教育も始まった。首里には教員養成のための師範学校や中学校も開講した。宮古は2年後の1882年、平良小学校を皮切りに、明治末期までに小学校は18校設立されている。その間、天皇を唯一の主権者とする「大日本帝国憲法」や「教育勅語」も発布され、「御真影」(天皇・皇后の写真)も全国の各学校に配布されて、「皇民教育」は本格化していく。

郡民多年の懸案であった中等教育機関は1928(昭和3)年、県立二中分校として設置され、翌年、宮古中学校として独立する。宮古高等女子学校は1936年、宮古郡町村組合立で開校、1940年、県立に移管されている。

#### ○「十五年戦争」と宮古

日露戦争以後、全国各地で靖国神社に直結する「忠魂碑」が建立されるようになった。宮古では1914(大正3)年以降、伊良部、平良、城辺、下地の4町村で建立され、事あるごとに同碑前で戦意高揚のための儀式が举行されるようになる。

ロシア艦隊発見を石垣島から大本営に打電した5人の若ものは、昭和に入ってから「爆弾三勇士」になぞらえて「久松五勇士」として顕彰され、また、ドイツ皇帝寄贈の「博愛記念碑」建立60周年記念事業は、日独軍事同盟締結にからめて宣伝されている。

太平洋戦争末期、宮古は三つの軍用飛行場を中心に全域軍事基地化され、3万の軍隊が展開した。地上戦こそなかったものの、米英軍の連日の猛爆で、平良のまちをはじめ集落の大方は焼失した。

#### ○戦後宮古の出発—「文化立島」めざす

1945年8月15日 敗戦。宮古もこの日が終戦である。8月31日「御真影」は焼却された。「皇民教育」の終焉である。宮古支庁は同日付で教員の人事異動をおこない、9月15日学校教育を再開している。

物資不足のなか、同年12月には新聞、翌年3月、文芸誌も創刊され、「文化立島」「強力なジャーナリズムの形成」等が提唱されている。1947年、宮古支庁は民政府に改められ、戦後宮古の出発を先人の歴史に学ぼうと、「新宮古建設の歌」の公募、文化連盟や文化史編さん委員会を発足させ、3人の歴史家—伊波普猷・富盛寛卓・慶世村恒任—の追悼会を催している。

#### ○宮古の特性—「郡民性」

明治期、宮古を訪れた山縣有朋、笹森儀助、一木喜徳郎…らは、異口同音に宮古の人は県内どの地域とも違って、「慥慥の気風あり」と指摘している。慥慥とは「荒々しくて強い」との意のようだが、「直情径行」「積極果敢」とも言い換えられよう。近年は「アララガマ精神」などと報道されている。

14世紀末から、16世紀初頭にかけて、かつて古老らが「トゥコムヤ・ヌ・ユー」と誇らし気に口にしていた、宮古のある種の「自立」した時代に基礎をもち、その後の人頭税社会等をへて、形成された「宮古郡民性」であろう。

#### ○あふれる熱気

「総論」とあって、すべて概要だけに止どめたが、会場は130余人の参加者で熱気にあふれていた。

質疑に入って、映画「スケッチ・オブ・ミヤーク」をどう思うか、上水道の普及以前の宮古は生活用水をどのように確保していたか、大正ロマンの影響はなかったか、宮古には800余の御嶽があるようだが、なぜそんなに多いのか、など。

なかには司会の同意を得て、年輩の女性が若いとき愛唱したという「新宮古建設の歌」を3番まで熱唱して拍手を浴びるなど、宮古への関心の高さをうかがわせていた。

## 第2回 考古資料にみる宮古

### 下地和宏(宮古郷土史研究会)

先史時代の宮古・八重山は南部琉球文化圏に属し、奄美・沖縄の北部琉球文化圏との交流はなく、どちらかというと南方系の要素をもつ文化圏である。

宮古・八重山の先史時代は、土器を生産する「下田原期」と土器を生産しない「無土器期」に区分される。波照間島の下田原貝塚を指標とする下田原期は、4200年前からおよそ600年間続く。下田原期の人々は突如として姿を消し、およそ2000年の時をへて石垣島の砂丘地、名蔵貝塚に土器を生産しない人々が現れる。

宮古では唯一多良間島の添道遺跡が下田原期に属する。石垣島のピュウツタ遺跡と同様砂丘地に形成された遺跡で4200年前と想定されている。およそ1400年の時を経て、宮古島の長間底浜、浦底浜、新城浜などに人々が住み始める。シャコガイの蝶番部を利用して

貝斧を制作する人々である。

宮古には石斧の石材がないことから貝斧を制作したとされる。宮古で多量に出土する貝斧は、八重山では名蔵貝塚30数本がもっとも多く、他の遺跡では1、2本に過ぎない。この貝斧については、フィリピンに源流があるとする考えがある。一方、先島とは2000年あまりの時間的な隔たり、先島との間の島々に貝斧が存在しないことなどから、先島自生とする考えもある。

AD1・2世紀頃、貝斧を制作する人々は突如としていなくなる。次の「グスク」時代までの間、およそ1000年は空白期とされていた。最近、島尻南嶺の長墓遺跡や友利元島遺跡の年代測定値が5～8世紀と示され、空白期はつながりつつある。

12世紀の後半頃、博多商人らによって長崎産の滑石製石鍋、奄美・徳之島産のカムイヤキ、中国産の白磁玉縁碗および褐ゆう陶器などが琉球にもたらされる。とりわけカムイヤキは与那国島までまたたくまに広まる。この新しい文化の流入は、北部琉球と南部琉球を一つの文化圏に組み入れた。いわゆるぐすく時代の始まりである。

波照間島の大泊浜貝塚から出土した石鍋、白磁玉縁碗、カムイヤキのうち、住屋遺跡から石鍋とカムイヤキ、ミヌズマ遺跡から白磁玉縁碗、カムイヤキ、石鍋の加工品が出土している。砂丘地に形成された大泊浜貝塚と同時期の住屋、ミヌズマの両遺跡は、石灰岩台地状に形成され、宮古と八重山では住む環境に違いが見られる。

石鍋は牛4頭と交換価値があったという。石鍋の流入で石鍋模倣土器、滑石混入土器が制作されている。模倣土器に貼付する方形の縦耳は、その後横耳へと変化し、さらに後口縁部部下に貼付するようになる。いわゆる深鍋状の外耳土器で八重山の土器の主流を占める。また、鉄鍋の流入でその模倣土器も制作されている。

宮古でも土器の外耳の変化は同様であるが、大きな違いは壺形土器、浅鉢形土器へと変化し、外耳は消滅することである。

18世紀の「旧記」に「土かめ」とあるが、肩部に波状沈線文を施し規格化された壺形土器と考えられる。いわゆる宮古式土器である。この種の土器は八重山、沖縄、徳之島でも確認されており、移出された可能性もある。

グスク時代の初期12、13世紀の遺跡は北から東海岸かけて6遺跡、西側に2遺跡が確認されているに過ぎない。ところが13世紀末から14世紀にかけて4、5倍に増えている。多くの人が宮古に移住したのであろう。

住屋遺跡では15世紀の半ば頃、竪穴住居から6本あるいは8本柱の平地住居へと変つている。住居の大きさは3坪から4坪ぐらいである。重要なことは家屋の近くの土坑に死者を埋葬していることである。ミヌズマ遺跡でも確認できるので少なくとも15世紀頃は墓域は特になかったと見られる。また、幼児は石棺墓に埋葬されていることが特徴的である。

課題として、先島先史人のルーツ、離島における「無土器期」遺跡の確認、土器編年の確立などがある。

### 第3回 古琉球・近世琉球期における宮古社会の諸相

豊見山和行(琉球大学教授)

近世期において、宮古の定納船は八重山で建造されていたが、その経費の一部を負担しない慣行があった。その問題を手がかりに、1500年に起こった八重山征服戦争以降、宮古勢力が八重山地域に及ぼしていた影響力(森林資源確保)の問題を取り上げた。さらに、1611年、琉球を制圧した薩摩藩は、宮古島へ日本商人の渡航を禁じる法令を布達していた。その背景を探ると、古琉球期の宮古島は海上の交易ルートにおいて重要な結節点であったことが浮かびあがってくる。

近世期の問題については、主に近世末(1870年代)の宮古社会の諸相を次の点から取り上げた。1872年、首里王府は宮古島へ①時・ユタの禁止(島民に対する宗教政策)、②クイチャー舞い禁止(島民の風俗面への介入、矯正策)、③作物の窃盗行為の禁令、を布達していた。特に、王府は③の盗難事件を憂慮していた。王府内での協議は、「宮古島では、原々(耕地)や屋敷内からの諸作物の盗難が多く、以前から種々その取り締まりを命じているが、改善が見られない。日頃の取り締まりが緩いため、苦心して栽培した唐苧(苧麻)、木棉花、藍、諸野菜等が盗まれ、さらにそれらの窃盗行為を恥とも思わない者が多い」との報告を受け、その対処策として「取締りを厳重にし、管轄役人や筆者らを常時奔走させて監視させ、盗人本人へは盗品に応じて流刑や所払い、日晒し刑などに処すこと」と厳達していた。しかし、その効果がどれほどあがったかは不明である。

宮古島の農業生産に関する報告が1872年5月付けで王府へ提出されていた。下里村から嘉手苅村まで全32村の農具(鋤、牛用の鋤など、石鋤、斧、)の不足状況が報告されていた。「鋤は六一七刃、石鋤は四九一刃、その他農具以外の斧一九五刃、カニガラ・金槌三四一刃、牛の鋤一八刃、カネツヅー一〇」が、村々での農具の不足数であった。首里王府は百姓の農具所持について重視していた。この報告では、久貝、松原、来間、宮国、新里、砂川、友利、保良、新城、比嘉、長間、野原村に関する記載は見られない。これらの村々では農具を充足していたことを物語るのか、なお検討が必要と思われる。ともあれ、農具の所持状況の把握は、宮古島仕置において、農業生産への具体的改善策と王府は捉えていた。

また、右の村々の農業生産に関する現状報告も同年付けで、王府へ報告されていた。各村の生産物は小麦、大麦、菜種子の3種類を基本としていた。粟の記載が欠けており、その理由は不明である。全村が下作(不作)であった。その中で伊良部村は小麦133俵余、大麦208俵余と最高の生産額となっていた。

その他、近世末(1800~1870年代頃か)の宮古島の宗門人別改帳の断片を紹介した(琉大附属図書館、伊波文庫)。役人名や女性名から宮古島のものであることが判明した。最後に、1857年、伊良部島の添え百姓、名子などを元に、添え村の村建ての問題などを検討した。

古琉球から近世琉球期における宮古社会に関して、断片的であるが、多方面から分析することで、あらたな宮古史像への足がかりとなることを目指したものである。

#### 第4回 人頭税と博愛美談 ―宮古史研究の新しい論点と視点―

平良勝保(沖縄県労働金庫)

先島とりわけ宮古の歴史研究では、人頭税をめぐる問題はさけて通れないテーマである。今回は、「人頭税制度は先島差別の象徴か」を再検討し、近世の異国船への対応をとおして、博愛美談に言及し、近代史の諸問題についても述べてみたい。

これまでは1637年が人頭税の起源とされてきた。安良城盛昭は、これに対し、古琉球起源説を提起、多くの賛同者を得た。安良城以前の研究は、「人頭税」を世界史的枠組みで理解するのではなく、近世先島の税制は「人頭税」なのだ、という所与の前提から出発しており、安良城説が説得力を持つゆえんである。いわゆる人頭税は、近世の史料では「頭懸」と記されており、近世の頭懸は1629年と1637年に制度の変更があった。従来の起源説は、税制変化のターニングポイントの一つといえる。

近代まで残った人頭税の基本的なかたちは、1660年の喜屋武親方の仕置ある。これによって、人の位が上・中・下・下々と分けられ、村々の生産力が加味されて賦課されるようになった。耕地は、理想的にはひとりあたり約13反与えられることになっているが、実際には等分の配当は難しかったと思われ、18世紀初頭には、耕地の持ち過ぎの人と少ない人の差が大きかったことが報告されている。ところで、人頭税は先島差別の象徴だと語られることがある。いわゆる人頭税は古琉球から存在しており、琉球王府が先島を琉球化できなかった一つの証といえる。

西洋と宮古島の出会いは古いが、本格的な異国船の来島は、1797年、プロビデンス号の来島と遭難を画期とする。プロビデンス号の乗組員は、宮古島に上陸し、多くの食料を得て船に積んであった小型帆船で中国に向かって去って行った。トラブルもなく、異国人(船)への対応が出来たのは、琉球王府(ひいては薩摩・江戸幕府)による異国船対応マニュアルが作成されており、その通り対応したことに加え、有能な唐通事(中国語通訳)の存在があったからである。アヘン戦争を前後にして近世の宮古には多くの異国船が来島し、また漂着した。

昭和初期に「博愛美談」として脚光を浴びることになるロベルトソン号の漂着は、1873年、沖縄県が設置される直前である。1876年、感謝のためにドイツ(当時はプロイセン)からチクロープ号が派遣され、感謝碑が建立されたが、チクロープ号は東アジア海域にドイツ船の寄港地を探す内命を帯びており、宮古島の測量もしっかり行って帰った。すなわち、感謝という衣に下に鎧を着た訪問であった。後に、ドイツは中国の青島に租借地を得た。

沖縄県の設置後も、宮古では人頭税が残り、平良の旧慣支配層が農民のうえに君臨していた。これまで人頭税廃止運動は、その反体制的側面が強調されてきたが、断髪運動を伴っており、皇民化運動の一翼をも担った、平良士族に対する農民の抵抗運動であった。そのため、当時の奈良原知事も運動を止めることはできなかった。また、人頭税廃止運動は、砂糖キビを中心とした作目自由化の運動であり、赤字貿易に悩まされていた明治政府にとって、砂糖の増産は国策でもあった。このように、運動成功の背景には必然的要因も多い。

久松五勇士は、1934年の新聞には四人と紹介されている。偽りの可能性はないか、再検討を要する課題である。博愛美談も、一般論から見て、自ら「博愛」を名乗る者を世間は博愛の人とはいわない。人を救助したことは自慢すべきではない。宮古の人々は、前近代には中国や朝鮮に漂着し救助されている。建碑60年記念式典が行われた当時、中国に軍隊を送り込んでおり、また朝鮮を植民地として支配していた。全国的に、軍国美談には歴史の偽造が多いといわれる。

## 第5回 宮古の御嶽と祭祀

### 本永 清(宮古の自然と文化を考える会・理事)

多くの民族が独自の神話を所有しています。神話はそれを抱く人々の宇宙観・世界観の表現であると考えてよいでしょう。「宮古島記事仕次」(1748年成立)の冒頭に、宮古島の起源神話が次のように記載されています。

上古、コイツヌという男神が、天帝から天の岩戸の尖端をもらい受け、下界の大海に投げ入れて宮古島を作った。天帝は島の上に赤土を下ろしてかぶせ、また、コイツヌにコイタマという女神を連れ添うことを許してくれた。そこで、二神は地上に天降りして、島の守護神となり、そしてソダツという息子神、ヨシタマという娘神を設けた。赤土では穀物が稔らず、飢饉が度々あったので、天帝はこれを憐れんで、さらに黒土を下ろしてくれた。それで、地上は五穀豊穰になって、食物に恵まれるようになった。ソダツ神、ヨシタマ神が10余歳の頃、地中から遊樂の男女二神が現れ、男神は樹木の紅葉で身を装っているのが「木荘神」、女神は青草で身を装っているのが「草荘神」と呼ばれた。コイツヌ、コイタマ二神は、この男女神の出現を喜んで、草荘神を息子のソダツ神と、木荘神を娘のヨシタマ神を結婚させた。ソダツ神は男子であるので東仲宗根の地を、ヨシタマ神は女子であるので西仲宗根の地を、それぞれ父親から与えられた。さて、ソダツ神にはヨナフシノマヌシという息子神、木荘神にはソイマラツカサという娘神ができた。そして、両者が結婚して、宮古島民の祖先となった。(口語訳)

この神話では、天界と下界、天降りした男女二神、天上系の神々と地中系の神々の結婚というように、島の起源や人々の誕生が二つの物(者)の対立と統一、つまり双分的な宇宙観・世界観によって見事に説明されています。この神話によって、私たちは宮古の人々の宗教的なものの見方・考え方というものを、一つの体系をなすものとして理解することができます。

1500年に八重山でオヤケ・アカハチの乱が起こり、その鎮定に勲功のあった仲宗根豊見親玄雅の妻オツメガが後年、琉球国王より宮古の大按母に任じられます。この任官を受け入れることによって、宮古の神女たちも琉球王国の神女組織の中に深く組み込まれ、宮古は以後、宗教的にも琉球王国に従属することになりました。

宮古に現存する最古の文献『御嶽由来記』(1705～07年成立)には、宮古在来の御嶽25カ所が記載されており、各御嶽に一神もしくは複数の神々が祭られています。御嶽の祭神

は、男女の性別を設けた人格的機能神とでも言うべきもので、男神とか、船守の神などといった表現が見えます。宮古の人々の信仰は、すでに早い段階から多神教的様相を呈していたと言えましょう。

そうした歴史の繋がりの中で、今日における宮古の人々の祭祀生活を眺めると、そこに祭祀の二重構造を読みとることができます。つまり、宮古の人々は、かつての公的な神女ツカサと、その集落固有の神女サスの二人を立てて、今の字レベルでの祭祀を行っているということです。そのことは、特に各祭祀で神前に飾られる供物の配置を観察すると容易に理解できます。

供物の線香は、宮古の人々の神観念や宇宙観を反映しています。供物の種類には、農作物や海からの贈り物が多いのですが、厄払いなど浄めを目的とした祭祀では、豚肉を用いることがあります。供物の種類は、その祭祀がいかなる目的で行われるのか、それを判断する指標にもなりそうです。

## 第6回 宮古島 魂の物語——<sup>ウヤーン</sup>祖神を抱いて生きる——

奥濱 幸子(民俗研究家)

琉球の島々では、土地の根神を中心に、子孫繁栄、穀類の初穂祭、航海安全などの祈りが執り行われる。こうした祭祀は、例えば、宮古諸島の伊良部島の字伊良部で年間37以上、来間島で21以上が在る。字狩俣には、2006年までおよそ60余が在った。折節毎に繰り返される島々の祭祀には、古層の人々が神の世を希求する姿が在る。講座では、諸島のうち、最多の祭祀を有した狩俣の神女=祖神について述べる。なお、狩俣の祖神祭の発音については、ロシアの東洋学者=ニコライ・ネフスキーの「宮古方言ノート」複写版中に島尻「ujagan」、狩俣「ujam」と記しており、ここでも狩俣の「ウヤーン」と記す。

### (1) 狩俣のシマ立て神話を包護する「山」

宮古島の北端にある狩俣は、親族縁者で構成された共同体で半農半漁の営みがある。とりわけ、<sup>ナービイダ</sup>長い浜に沿って北東に伸びる標高20～30mの丘陵は、天然の防風防潮林としての役割をもつと同時に、「シマ立て」をした母ヌ神(女神)の魂が籠る山として、狩俣での現実の生活と精神の筋道に重要な役割を担う森を成している。

### (2) 詠み継がれた「シマ」立て由来譚=<sup>シマヌカムヌフサ</sup>母ヌ神ヌ神謡(要約)

母ヌ神は、始めに<sup>タバルチ</sup>田原地に降りた。始めの泉=カナギガーを見つけた。水量は多いが味が薄いので、次にクルギガーを見つけたが、水量が少ない。野山を越えに越えて、ヤマタガーを見つけた。水量は多いが、海に通う水で塩分が多い。野山を越えに越えて、最後にイスガーを見つけた。水量は少ないが、旨い水だ。ここを根と定めて住まった。

上記のフサは、旧暦10月～12月までの間に5回行われた祖神祭の2回目と5回目に、シマの最高神女=<sup>アツメ</sup>大母と神女によって詠まれる叙事詩である。祖神祭について『琉球国由来記』は「男子ヲバ、ハブノホチテラノホチ豊見ト云。一中略— 女子ヲバ、山ノフセライ青シバノ真主ト云。此者十五六歳ノ比、髪ヲ乱シ<sup>シロジョウエ</sup>白浄衣ヲ着シテ、コウツト云フ葛カヅラ帯ニ

シテ、青シバト云葛ヲ八巻ノ下地ノ形ニ巻キ、冠ニシテ、高コバノ筋ヲ杖ニシテ右ニツキ、青シバ葛ヲ左手に持チ、神アヤゴヲ謡ヒ、一中略— フセライノ祭礼アリ」と述べている。『琉球国由来記』に記されているということは、時の王府が公認した祭礼であることを意味する。近世の宮古には、人頭税が施行されており、女たちの織る布が貢納布に充てられていたこと。また、神女ファッションは、シマにもたらされた新鮮な琉球文化だったと思われる。したがって、神女=ウヤーンになることは、狩侯の女たちが憧れたステイタスシンボルではなかったか。とはいえ、神女=祖神に生まれ変わるには、幾つかの通過儀礼があった。

事例：集落から選出されて祖神が生まれる場合

①神籤によって候補者を定める。

②祖神女(祖神を務め、各元を管轄する神女を言う)が祖神候補者に告知を行う。

③祖神になることを承諾すると、己と相性の良い干支を持つ者をマウヌ母として向え、自らの「マウ」を据える。

④祖神祭二回目「イダス」の戌の日、祖神候補者は祖神女たちに伴われ、自宅から北ヌ山へ上る。山で数日間物忌を行う。

⑤祖神の婚姻(ササギ)(祖神祭三回目の戌の日に親族縁者が集まり祝宴を行う)。

(3)祖神を抱いて生きる

祖神が生まれる根家に嫁いだMさん(大正6年生)は、49歳のとき、初めて北ヌ山へ入った。山に上ると家族に何が起きてても下ることはできない。小学校へ入学したばかりの末娘が気掛かりで、気持ちを抑えきれず大声で泣いた。こうして、10年以上が経過した。山では祖神と出逢う確かな瞬間があった。

この行を終え、祖神女として子孫を抱くその姿勢は、背景となって子孫を懐に抱える形をとる。それは、祖神への信仰を享受した女の生きる姿の典型であつたらう。

## 第7回 ニコライ・ネフスキーと若水の神話

宮川耕次(宮古郷土史研究会)

大正から昭和にかけて、帝政ロシアから日本に留学・滞在した言語・民族学者、ニコライ・A・ネフスキー。この間、宮古を三度も訪ずれ方言・歌謡・神話など、多彩な研究を繰り広げた。

ネフスキーの日本留学の目的は、日本の神道、つまり原始的な信仰の研究であった。日本の神話発生の出発点、あるいは日本の神話的中心を見つけ、それによって神話の地域的発展の経過をある程度まで把握・決定するつもりだった。

神話の原因を知るためには、まだ残っているこれらの民俗、すなわち風俗、習慣、年中行事などに捜さなければならない、とネフスキーは考えた。そして宮古への旅は神話創生の中心の探究の中で、〈約束の地〉である、ともいわれている。

アカリヤニザガマの話

ネフスキーの幅広い研究のうち、ここでは、1928(昭和3)年に柳田國男らが発行する雑誌『民族』で発表したネフスキーの論文『月と不死』(未完)で取扱っている、慶世村恒任から聞いた「アカリヤニザガマの話」をとりあげたい。

一月および天帝が、節祭の新夜に、人にスディ水、蛇にスニ水を与えて人に永久の命を与えよ、と使者のアカリヤニザガマに伝え、両桶を担いで下界へ下ろした。途中小便の間、蛇にスディ水を飲まれてしまい、仕方なく人間にスニ水を浴びせた。その報告に怒った月の神は、罰としてアカリヤニザガマに両桶を担がせ月に立たせた—

ネフスキーは、この神話を分析し、根本要素と付随的要素に大別する。前者を「人間の死の起源」、後者を「脱皮する死の起源」とする。さらに、このタイプの神話は地球の各方面にあるとして、広く紹介している。

\*根本要素 — 人間の死の起源

①月および天帝は、人間に永久の命を与えるため、人を使いに出した②使者の怠慢が神の慈悲を無にした。③使者の処罰 ④永久の確証として月の表面に斑点がある。

\*付随的要素 — 脱皮型「死の起源」—不死と死の象徴として、月に変若(スディ)水、死水がある。

宮古における分布と伝播

これの宮古における分布を調べてみると、宮古島をはじめ池間、伊良部、多良間など各島々においても濃厚にあることがわかった。また、八重山、沖縄本島、奄美などいわゆる琉球一円にも広がっている。

この若水の神話は、人と蛇の若水をめぐる競争で人が負けたことを基本型とし、それを踏襲しつつも、ネフスキーが示した四つの要素(使者、怠惰、処罰、月の斑点)が、地域により微妙に変換する。文字のない社会での伝承のありかたなどを考えるうえで、地域性や無意識の世界などが表現されていて興味深い。

三度の宮古訪問がもつ重み

「人間の死の起源」を述べる「若水」の神話伝説に出会い、ネフスキーは、宮古、琉球、日本本土などに広がり、しかもかなり古い時代まで遡る普遍的なテーマを発見し、その意味では所期の目的を達成したとも言える。

ネフスキーは、言語や日本古代人の信仰などを研究するなかで、アイヌ、東北、さらには台湾の曹(ツォ)族など、当時埋もれた「辺境」の中に、古くて普遍的な人間の考え方を拾い上げようとした。戦争、革命など激動の時代をものともせず、三度も宮古にやってきて、宮古の基層文化を彫り起こした、その先駆的な営みと精神的な遺産を、大事にしていきたい。

## 第8回 宮古の歴史伝承世界

下地利幸(宮古郷土史研究会)

第八講「宮古の歴史伝承世界」では、宮古で豊富に伝承されて沖縄本島や八重山諸島と

は異なる神話伝承や御嶽由来伝承、歴史的人物等に結びつく特徴的な伝説・昔話などについて文献資料や民間で口承される伝承などからいくつか取りあげて紹介した。

## 1 神話的伝承

○起源説話(創世神話)[国土(島)の起源・人類の起源・文化の起源を説く]

漲水御嶽古意角・姑依玉二神による島づくり神話伝承／古意角・姑依玉二神は天の夜虹橋(あめのゆのずのばす)を渡って、盛加神を始め八十神百神を従えて漲水の地に天降りし、一切の有情非情を産し島建をする。(『宮古史伝』慶世村恒任)

伊良部黒浜御嶽の島建て神話伝承／兄弟二神による島建て・人類始祖伝承

城辺砂川上比屋御嶽伝承／天神の娘による島建て・人類始祖・穀物(五穀)の起源伝承

## 2 御嶽由来伝承

①漲水御嶽・蛇婿入り神婚説話(生まれた三人の子は島守護の神となる)

漲水御嶽蛇婿入り伝承は、記録の上では18世紀初頭には口承されて伝えられていたと思われる。宮古への伝播ということであればあるいはもっと古い時代が考えられる。14世紀中葉に争乱を鎮め宮古を統一したとされる目黒盛豊見親は「神祇崇拜の念を起し」て各地の神域を整備し、特に漲水御嶽には「島建ての神」として力を用い祭事など盛大に執り行ったと伝えられている。あるいはこの頃から「島守護の神」として伝承されていたことも考えられる。

②日光感精(にっこうかんせい)・卵生(らんせい)説話

太陽の精気に感じて懐胎した母から始祖あるいは、偉人、英雄が誕生する話。また、女が生んだ卵から神、英雄などが誕生する話。古い神話の要素を伝える話で、宮古ではこの日光感精、卵生説話が2つながら伝承されており、宮古の神話・伝説の豊かな特色のひとつとされている。

○伊良部比屋地御嶽由来伝承

日光感精によって孕み、子(島の始祖神)を産む、(神の子誕生邂逅型説話)

○宮古の神々の誕生(上野新里)

日光感精・卵精説話(日光感精によって孕み、十三個の卵を産む、卵から孵った子は宮古十三方位の神々として配られる)

○子方母天太(にぬばんまていだ)と大主(うはるず)兄弟(池間島)(『宮古史伝』)

日光感精の要素を伝える卵生説話(女が十二個の卵を産む、卵から生まれた子は宮古十二方位の嶽々の神として祀られる)

○来間島村建由来伝承(来間島豊年祭由来)

日光感精・卵精説話(女が日光感精によって孕み、三つの卵を産む、卵から生まれた3兄弟が、神(赤牛)と約束した祭りを復活し滅びた村を再建する)

## 3 氏族始祖伝承 [鯖祖氏・仲宗根豊見親]

○野崎長井の里の真氏誕生の事(産神問答(寄木の主)・男女の福分)

○西銘嘉播の親、長井の里の真氏を娶事(炭焼長者・再婚型)

○嘉播の親、子供三兄弟不孝の事(鯖の救助／竜巻の由来)

これらの説話伝承は連続する一連の話として語られ、目黒盛豊見親から仲宗根豊見親へつながる長大な氏族始祖伝承として語られる。(『宮古島記事仕次』)

## 第9回 宮古の神話・伝説・歌謡について

上原孝三(沖縄文化協会)

神話・伝説・歌謡は、一定の時間と空間の広がりの中で存在する。神話・伝説・歌謡は、いずれもその多くが事実そのものではない。だが、そこには何らかの意味があり、ときに人々の生活や思想・感情を強く規定するケースがみられる。

神話・伝説・歌謡は、たいていの場合口頭で伝承され、文学のジャンルでは口承文芸に分類される。口頭で伝承される神話・伝説・歌謡は、いってみれば虚構・フィクションである。だが、少なくとも口頭伝承された物語には、為政者や民衆の心性が刻まれている。

人間の頭の中に記憶された物語は、かつてはある社会の中で事実とされ、その後も何らかの歴史的真相を伝えるものとして扱われてきたものもある。口頭伝承された物語はそれを信じるものには事実と他ならず、何の違和感も覚えないうままその考えに従ってしまう。神話や伝説を信じた昔の人々を笑うことはできない。

例えば、日本最古の歴史書『古事記』(712年)の冒頭に掲げた創世神話は、日本列島の創造だけを語って、その外部の地域・沖縄などの創造には一行も触れていない。

かつて人々は、自分の住んでいる場所が世界の中心であると捉え、その中心に係わる限りで周辺部が存在した。「自分・ワタシ(私)」のいる場所が世界の中心である。その場所は典型的にはムラ(シマ)社会・共同体である。ムラ(シマ)の境界はほぼ明瞭で、境界の内と外の二つの空間がムラ(シマ)人にとっての世界全体をかたち作っていた。ムラの内と外は明確に区分され、ムラの外は何らかの影響関係がなければ、強い関心の対象ではなかった。即ち、地理空間としての世界の全体が成立し、その中の部分としての国が位置づけられ、更に細分化されての県、更に県の細分化としての市町村やムラ(シマ)ではなかった。そのことを理解しないと、ムラ(シマ)社会・共同体で創造された口頭伝承をうまく把握できないだろう。

ムラ(シマ)の起源になにがあったのか。神話・伝説・歌謡はムラ(シマ)の中で、いつ・どこで・どのように生まれたのか。伝承者(達)は何をどのように語り・謡ったのか。そして、それらをどう意味・位置づけてきたのか。また、ムラ(シマ)社会の中で人々はどう受け入れてきたのか。そのような口頭伝承の諸相や意味・機能を見極めることは大切な作業である。

南から北へ伸びる琉球列島の島々にはいくつかのタイプの創世神話が存在する。世界のいかなる民族もそうであるように、沖縄・宮古・八重山の人々も、自らの住む世界や人間の世の始まりについての口頭伝承や神話を持っている。だが、神話はいつ創られどこで語られたか。琉球王府(首里王府)によって編纂された歴史書『中山世鑑』(1650年)に次のよ

うな伝承が記載されている。『中山世鑑』に記載された神話が祭祀歌謡集『おもろさうし』にも見られる。神話の伝承が琉球王府の歴史書と歌謡集に文字化された。口頭伝承から記録化がなされた。また、『おもろさうし』には、3ヶ月に亘って御嶽に籠もる祭祀が見られる。現在、沖縄の恩納地方では3ヶ月に亘る祭祀は見られないが、宮古には存在する。宮古島市大神島・島尻・狩俣で行われる(行われた)ウヤガン祭がそれである。本講座では、狩俣のウヤガン祭に登場するンマヌカンの地上への降臨目的について報告した。

## 第10回 宮古方言の特徴

野原 優一(沖縄言語研究センター)

日本語は本土方言と琉球方言に二大別される。琉球方言が日本祖語から分岐した時期を、服部四郎は言語年代学に基づいておよそ紀元500年以前とし、日本祖語(弥生時代の言語)から原琉球語をもたらした九州から琉球への移住も、紀元2,3世紀頃から起こったであろうとした(『日本語の系統』1970)。その原琉球語がどのように宮古諸島に伝わったか、宮古方言の形成過程は明らかでないが、宮古方言には数多く古代語が残存する。

宮古方言の音韻的特徴には、例えば「花」をバナ [pana]と言うように、共通語のハ行(フを除く)はP音になる。花は奈良時代以前はバナと発音され、奈良時代にファナ、江戸時代にハナとなったが、琉球語諸方言では地域によってバナ、ファナ、ハナが使われている。またマズ(米, mai)やピストウ(人, pītu)などのイの中舌音 [i], フニ(船, funi)のf音、パヴ(蛇)のヴ [v] 音、イム(海)のム [m], 伊良部・多良間島のトゥリ(鳥)のそり舌音リ [ʎ], 多良間のミゼエ(水は, mize)に見られるエの中舌音 [ɛ] などがある。中舌音 [i, ɛ] は奄美方言、八重山方言にもあるが、とりわけ宮古方言の [i] は摩擦騒音が強く、昨今は舌先音とも称される。f音は八重山の黒島、鳩間島などにもあるが、v音があるのは国内でも宮古方言と黒島方言だけのようだ。そり舌音も特異だし、さらに大神島には濁音のない(有声か無声かの区別を失った) パウ(棒)、トウス(友人)、パキス(足)などがあり、この音声的特徴も他所にはなく大神方言のみといわれる。

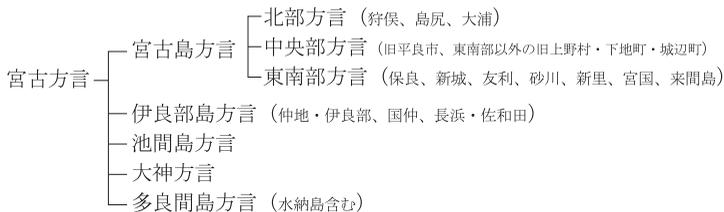
宮古方言は形容詞に特徴点が多い。「高い」には「タカータカ」、「タカムヌ」「タカーヌ」「タカーッタ」「タカカー」などの形式がある。とても高いなら「タカ〜〜アタカ」と強調の引き伸ばしをする。息を止めて引き延ばすと強調度は増大する。前述した「高い」の諸形式の中で活用があるのは「タカカー」のみであるから、これが形容詞である。宮古方言の形容詞は、例えば「タカカス」(高い)は「タカクアス」(高くあり)からできたもので、沖縄方言の「タカサン」のような「タカサアリ」からなることと異なる。沖縄方言の型を「サアリ型」、宮古方言の型を「クアリ型」と称している。奄美諸島、八重山諸島など琉球方言圏の殆どが「サアリ型」で、「クアリ型」は宮古諸島(多良間島を除く)のほかは、わずかに奄美大島笠利町佐仁、龍郷町円にある。形容詞の豊語形も極めて特徴的で、油という名詞を重ねて「アツヴァーアツヴァ」(油っこい)、味の出しから「ダスーダス」(味が良い)、子供から「ヤラビーヤラビ」(子どもっぽい)などがあって面白い。

語彙では、上代の語頭ワ行「わwa、ゐwi、う(wu)、ゑwe、をwo」がバ行に対応する。私バンは古代語「わぬ」から、座るビースは「ゐ、坐る」、酔うビューは「ゑふ」、十二支のみビースは「ゐ亥」、おばブバは「をば」、砂糖きびブーギスは「をぎ荻」など。

宮古方言の敬語は丁寧語(です、ます体)が未発達だが、その要因の一つに宮古方言の不完全叙述体(文末に「～だ、～である」を入れない)がある。～ドゥ ヤス(～だ)があるが強調する意で使われる。最後に、一日も早く「宮古方言仮名表記」の確立を願う。

宮古語も地域によって異なるが、表1のように区分できると考えている。

(表1)宮古諸島の方言区分(私案)



## 第11回 宮古におけるシャーマンの世界——宮古の精神世界の原点を探る——

佐渡山安公(民俗研究家)

人間は現世でも、あの世に行っても救われたいという願望がある。シャーマン(宮古ではカンカカリヤ・ムヌスー・トゥキ)は現世とあの世との橋渡しの役割を担っている。それは霊や神を呼び込むことによって人への援助をする。このことの技術的な方法はカンカカリヤ個々人によってかなりの違いが見られる。そして、人びとへの援助も、そのカンカカリヤの得意の分野、あるいは能力によって多少の違いがある。

沖縄では身内に不幸が起こったり、病気になったり、あるいは娘の結婚、家の新築、離婚等々、様々なことなど、自分たちで判断出来ないことについてカンカカリヤの援助を得る。一人のカンカカリヤだけにとどめず、2～3名のカンカカリヤの援助を求め、そして、最終的には、これらのことを基にしてクライアント(相談者)は判断するのである。また、ムラ(集落)のツカサ(神女)や役員たちも、2月マーラマイと言って1年に1回、カンカカリヤに自分たちがやってきた祭祀はどうだったか、神に通じているのか、不足があるのか、これからどうすれば良いのか、また、ムラの司の選出・誰々が神に選ばれているのか等々を占い援助を得る。

それではカンカカリヤはどのようにして誕生するのだろうか。カンカカリヤは神によって選ばれ成巫過程を通して霊能者になっていく。幼少の頃からサーダカンマリ(神高い生まれ)と言われ、身体的に虚弱であったり、普通の人と異なる特異な体質を持つ。その後、危機的な苦悩を経験することが多く、人生の大きな転機に立たされる。例えば、夫婦、家族間の不和、大病の経験、家族の死、経済的失敗、生活苦などの心身の苦悩が積み重なって、不眠不休の状態におちいり、身体の不調、病気などと並行して心身の異常があらわれ

る。心身の異常の中で幻覚、幻聴がおこり神霊が働きかけをする。ぞくにカンダリー(神が乗り移り神の言うままに歩かされる)、あるいはカンプリ(神に振れる)といわれ半病人のように真夜中ふらふらとさまよい廻る行動をとらせる。これは成巫過程における修行である。このカンダリーの中で多くのカンカカリヤを訪ねたり、自分に関係のある祖霊神を祀る御嶽を巡ったりする。そのことによって、カンカカリヤとしての自己形成がなされるのである。

カンカカリヤにとってマウカミはもっとも重要な側面である。マウは宮古の信仰の特性であり、マウ神は男性にも女性にも神各化して祀られ個人を守護すると考えられている。「マウをカミル・マウを供す・マウを仕立てる」等と言われる。一般的に成人になって身体的、精神的に異変があって、自己の気を高める等々で、マウをカミ(供)たりする。マウ神を御供することは宮古では人生儀礼の一つである。マウ神は、生涯に渡って、その人を守り続ける守護神であり、その人の運気を奮い立たせる神である。その為に、求めるマウ神は、その人に関連する歴史的系譜に繋がる神でなければならない。カンカカリヤはンマザス(母シャーマン)の指導のもとにマウを供していく。その場合先祖が拝んでいたウタキを回り、ツツ(先祖神)や指導神が誰なのか、悟らなければならない。間違ったマウカミ(マウをお供する)をした場合、カミダリーがひどくなったり、神の道明けの妨げとなったりする。

宮古島のカンカカリヤは祈りの中で感情が高揚してメロディにのせて即興歌を歌う、これはウクイ(御声)と呼ばれ、メロディはシャーマンそれぞれの特性のもの。このようにウクイが形式化されて神歌が創造されていったと考えられる。しかし今日、ウタキ信仰が衰退していく中で数多くの神歌が歌われなくなり、消滅の危機にある。また同時に、宮古のシャーマンの世界も危機的な状況に立たされている。

## 第12回 宮古の機織り——地機について

仲間伸恵(琉球大学講師)

はじめに

現在、宮古上布はすべて「高機」で織られています。高機が宮古に入ったのは明治41年からだといわれています。では、それ以前の宮古の織物はどのような織り機で織られていたのでしょうか。稲石の綾錆布も貢納布も、上布(苧麻布)に限らず芭蕉布も木綿布もすべて「地機」で織られていたはずですよ。

地機とは

高機では、たて糸は織り機自体に固定されて織り手は機の手前側に椅子に座るように腰掛けて織ることができるのに対して、高機以前の織り機である地機では、たて糸の片側が織り手の腰に固定されます。そのため、たて糸の張り加減を織り手自身の身体の動きで微調整しながら織ることになります。

人の暮らしのなかで、大切に使い込まれてきた手仕事の道具というのは、地域の文化などを映し出して、それぞれに大変興味深いものですが、もちろん、機織りの道具もそのと

おりです。今ではほぼ見かけなくなった宮古の地機は、どのような織り機だったのでしょうか。

### 宮古の地機

高機に役目を譲って使われなくなった地機ですが、調べてみると、旧上野村農業資料館、宮古島市総合博物館、多良間村ふるさと学習館、池間島などに、地機や地機関連とみられる道具類が残されていました。

これらの資料を調査して分かったことは、宮古タイプの地機には他では見たことのない、「丸太状の大きな経巻き具」が乗っかっている、ということです。経糸を巻き取って機台にのせるための道具である経巻き具の形状は、一般的な地機では両端が幅広になった板状あるいは棒状です。ところが、旧上野村農業資料館でみつけた地機では、でいご材の丸太型のものになっており、宮古島市総合博物館に所蔵されている地機(狩俣より寄贈)には、電柱を廃材利用したと思われる大きくて重い杉材の丸太が使われていました。

念願だった宮古の地機調査でのこの発見は、興味深いけれど織り手の側から見ると途方に暮れるものでもありました。なぜ、経巻き具をこんな形にする必要があったのだろうか。重くて、かさ張って、すぐく扱いにくそうに思えました。

この丸太型の経巻き具は本当に使われていたのか、なぜ宮古だけこのような形状なのかなど、さまざまな疑問を持ちつつ、多良間、平良、狩俣、砂川、友利などで年配の方々から聞き取りを行ったところ、たしかに宮古では丸太型経巻き具の地機が使われていたようだ、という結果が得られました。

### 宮古型地機で織ってみる

なぜ、宮古の経巻き具はこんなに大きい丸太型なのか、この形に何か理由や利点があるのか。宮古織物研究会では、宮古型の地機を再現して実際に織ってみることにし、まずは地機織りの基本的な技術の習得に努めながら、試織に取り組んでいるところです。

### 新たな可能性を探って

「地機は経糸に無理な力をかけずに織れるので、糸に優しくて苧麻糸に合っているのではないか」「地機で織った着物と高機で織った着物では、着心地がちがうらしい」などと聞いたことが、地機に興味を持つきっかけになりました。「地機は身体的に負担が大きい」「高機に比べて著しく効率が悪い」ということも言われます。けれども、大量生産をめざした時代とはちがう今だからこそ、「地機織り」も宮古の織物の新たな可能性のひとつとして捉えることができなんでしょうか。

「織物産地・宮古」がいつまでも元気に、美しい苧麻の糸を績み出し、美しい布を織り続けてほしいと心から願っています。

## 第13回 宮古の民俗音楽—旋律から考える—

狩俣康子

宮古では「歌」はアーク・アヤグとよばれている。具体的に言えば長アーク・クイチャー

アーク・とうがに・船漕ぎ歌・作業歌等で、歌われる時や場所、旋律の特徴からこのような分類がされてきた。御嶽や祭事で謡われる神歌には上記以外に独自のものがある。対句を連ねるクェーナ形式の、何十節もある歌詞を持つ長歌の存在が特徴で、中でも声を長くのばして歌われる非拍節的な長アークは宮古独特のものといつてよいが、今では殆ど聞くことができない。パターン化した手踊りで歌われる拍節的なクイチャーの中でも、叙事的なクェーナ形式の長歌型は古いものと思われるが、全曲歌われることは殆どない。三線の伴奏がつくようになってからは、歌いながら踊るといふ昔ながらのスタイルはすたれてしまった。

歌謡研究では、歌は声にだしてはじめて歌になるという当たり前のことが意識されることはなく、旋律から歌を考えるという視点が皆無であった。旋律による分類を試みると、多くのヴァリエーションを持ちながらも同系旋律としてまとめることが可能な民謡が多く、伝播の過程で生まれたであろう多様な歌詞は替歌といつてよい。替歌の存在は、歌詞が生まれ易く変化も早いという事を示している。一方魅力のある旋律は中々産まれてこないで、歌詞に比べ旋律の寿命は思いのほか長い。

三線の伴奏を伴うようになって工工四にまとめられた民謡は一部にすぎない。民俗音楽の音としての記録は録音機の民生品普及によって1960年代より始まった。そこには口承文化の消滅を危惧する社会背景がある。録音資料を視覚化した楽譜集や、音資料としての視聴が可能なLP・CD・VTR・Web上のデータベース等を活用することによって、伝承音楽を今に活かす可能性が広がっている。

20世紀末まで伝承されてきた狩俣の神歌群(ニーリ タービ フサ ピヤーシ トコロフン等)は、宮古の他の地域では見られない特異なものであるが、宮古音楽の中での位置付けは未定であった。同系旋律が他のジャンルの神歌で歌われたり、旋律の一部が借用されたり、旋律の相関は複雑でその背後にある神歌の関係性を見極めなければならない。借用の関係は元歌の存在が前提であり、両者の時間的な前後関係は、歌詞や史料とのつきあわせから時代考証を可能にするものである。狩俣の神歌は16世紀半ばから18世紀前半に作られたものである。神歌で歌われている「神」は当時の狩俣の人々で、従来言われてきた程古いものではない。

狩俣は白川氏の故地である。白川氏は宮古が第二尚氏の統治下に組み入れられた16世紀以来、頭を始めとする宮古の役人層や神女組織の筆頭に位置する大阿母(うぶあん)を輩出してきた。狩俣は大阿母を通じ、王国の祭祀を模倣し、導入し、実践し、保持してきた。そこには古琉球の王国祭祀の投影ではないかと考えられる事象がある。その一方、従前の祭祀を複合することによって、第二尚氏の神女制度に適合してきた。古琉球から薩摩侵入・羽時仕置に至る当時の王国統治の変化の過程で、大阿母と首里の直接交流は徐々に途絶えていくことになるが、王国の干渉をかわしつつ、独自性を保持して時代を生き抜いてきたと思われる。

白川氏の社会的地位から、狩俣の神歌の一部は他地域の祭祀の規範となった可能性がある

る。神歌の一部に見られる定位置の「イ」というハヤシは類似のものが沖縄のウマイにも見られ、古琉球時代の神女制度の中で、神女の直接交流を通じて狩侯の神歌にもたらされた時代様式と考えられる。この「イ」は民謡に流入し長アークに現れる、また王府おもしろの歌詞の音の直前に位置する「𠄎」との関連性も考慮しなければならない。

## 第14回 世界の視線からみた宮古研究 — 御嶽・神話・歌謡 —

上原孝三(沖縄文化協会)

南から北へ伸びる琉球列島の島々にはいくつかのタイプの創世神話が存在する。世界のいかなる民族もそうであるように、沖縄・宮古・八重山の人々も、自らの住む世界や人間の世の始まりについての口頭伝承や神話を持っている。だが、神話はいつ創られどこで語られたか。

琉球王府(首里王府)によって編纂された歴史書『中山世鑑』(1650年)に創世神話伝承が記載されている。記載された神話で確認したいことは、「国頭辺戸のアス杜・今帰仁のカナヒャブ・知念のサイファ御嶽・玉城の天頂・久高島のコバウ杜・首里杜・真玉杜」などの聖地を作り上げた後に人間を作ったことである。神話においては、御嶽造りは人間創造よりも優先されるべき事柄だった。御嶽は神話を語る装置になっているのである。沖縄の宗教儀礼歌謡集『おもしろさうし』全22巻には1554首のおモロが収められている。『おもしろさうし』は16世紀から17世紀にかけて琉球王府によって編纂された。『おもしろさうし』にも創世を謡った有名なオモロがある。巻10-512のオモロがそれである。

『中山世鑑』に記載された神話が祭祀歌謡集『おもしろさうし』にも見られる。神話の伝承が琉球王府の歴史書と歌謡集に文字化された。口頭伝承から記録化がなされた。このことは何を意味するのか。

御嶽の内や周辺で神話・歌謡は語られ、謡われたりした。沖縄や日本あるいは海外の研究者が御嶽・神話・歌謡に注目するのも、御嶽のもつその多様な機能性があるからである。

世界の視線から宮古研究をおこなった者にニコライ・ネフスキー(1892~1937年)がいる。ネフスキーは、ロシア生まれの東洋言語学者。日本には14年間滞在し、宮古に3度来島した。そして、宮古の言語・慣習・伝説・歌謡等を研究したのである。研究者の中には、ネフスキーにとって宮古は「約束された地」というものもある。

ネフスキーは、1922(大正11)年・1926(大正15)年・1928(昭和3)年の3度に亘り、宮古に来島し調査研究している。彼の宮古に関する多くの論考は『月と不死』(東洋文庫 平凡社 1971年)に収録されている。

ネフスキーは優れた言語学者・民俗学者であったが、ネフスキーを惹き付けて止まなかった宮古に何があったかということが問われねばならない。逆にいえば、宮古はネフスキーにとって豊饒な土地であった。日本の古代を学問の対象に据えていたネフスキーにとって、宮古は古代そのものに見えたかもしれない。世界的な学問視線を有するネフスキーにとって、宮古との邂逅は刺激に満ちた土地であったし、未知との遭遇でもあった。